

2 コラム RAMPWAY  
泉 麻人

特集 未来の自動車と道路

5 道路交通システムの  
マネジメント

慶應義塾大学 名誉教授  
川嶋弘尚

9 クルマはまだまだ進化する

自動車評論家/日本自動車ジャーナリスト協会理事  
岡崎五朗

13 CHALLENGE  
環境技術の導入

14 コラム オン・ザ・ロード  
三木 卓

16 首都高HEADLINE

18 business essay  
未来のモビリティ～宇宙エレベーター～  
日本大学 理工学部 精密機械工学科 教授  
青木義男

20 つくる人まもる人  
首都高メンテナンス西東京株式会社  
有野正敏 青柳正和

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Minoru Saito  
contents produced by  
Metropolitan Expressway Company Limited

illustration by Takao Nakagawa



column | RAMPWAY 19

## 首都高名所案内 品川宿の寺社巡り

コラムニスト  
泉 麻人

子供の頃から地図好きだった僕は、ちよつとしたときに東京都23区の区分地図帳をめくっていたものだが、あるとき品川より南に北品川という駅があるのに気づいて、へーっと思ったことがあった。さらに、京急の北品川は品川区内に存在するが、品川の方は港区の領域なのである。

そう、そもそも東海道の品川宿は品川駅よりずっと南方にあつて、つまり

の前あたりに「土蔵相模」の石碑が立っているが、土蔵相模とは江戸幕末の有名妓楼で、長州藩の武士が鼠舩にしていたという。川島雄三監督の名作「幕末太陽傳」の舞台（フランキー堺主演の喜劇）にもなった場所である。

やがて品川橋という橋に出くわす。下を流れるのは目黒川、首都高速の中央環状線は大橋JCT近辺から、ほぼこの川底のトンネルを通っているのだ。橋の右手にもう一本、赤い橋が見えるが、この鎮守橋の際に荏原神社が存在する。木立ちに覆われた風趣な神社、ここは昔からノリ漁の繁栄を祈って海中渡御を行う、かつば祭が催されている。もはやノリ漁は廃れてしまつたが、釣り舟の漁師が管む小体の天プラ屋などが周辺に点在している。

神社もあるけど寺も多い。とくに進行方向右手の陸側。海徳寺とか海雲寺とか、海名義の寺が目につくのも風土を感じさせる。南品川海雲寺と隣り合う品川寺は、音読みでホンセンジという。この寺も、先の荏原神社も初めて訪れたのは、七福神巡りの取材をしていたときだ。ここに祀られた毘沙門天を目当てにやってきたのだが、それよりも入り口にドカンと鎮座された巨大な青銅地蔵に目を奪われた。江戸六

北品川はその北側という意味合いなのだ。今回は東海道を中心に品川界隈を案内したいと思う。

昔の東海道の入り口は、ちよつとわかりにくい。品川駅から目の前の第一京浜を南下して、八ツ山橋を渡った先の「進入禁止」（逆一通）の看板が出た狭い道だ。京急の踏み切りを渡ると商店街が始まるけれど、惜しくもあまり古い建物は残っていない。コンビニ

地蔵の一つに数えられるものらしい。境内にはもう一つ、幕末の戦乱期に海外に持ち出され、昭和初期にスイスのジュネーブで発見、返還されたという波乱万丈の梵鐘がある。

東海道を歩き、こういう寺の横道なんかに入っていくと、古いポンプ井戸がぼつんと放置された路地裏に残っていたり、銭湯の煙突が垣間見えたり、城南の下町気分が味わえる。

第一京浜の向こうの高台に足を向けるのもいい。お勧めのポイントは北品川の品川神社。五十段余りの石段を上った境内の一角に、さらに石積みした富士塚（品川富士）が築かれている。1933年（昭和8年）に刊行された「大東京写真案内」（復刻版もある）という写真集には、ここから東海道の家並と海の沖に浮かぶお台場を見渡した、絶景ショットが載っている。いまは惜しくもビル群しか見えないが、旧景を想像するのもいいだろう。

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。「週刊TVガイド」などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』（講談社）がある。